

受験に失敗した若者に差す光

私は浪人時代に河合塾で芦川先生に英語を教わった。先生の基礎貫徹英語ゼミ(キソカン)は1、2時間の延長が当たり前で、終了後も講師室で暗記した英文のチェックをしてくださった。

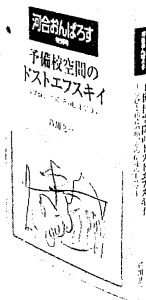
第1部は、そんな情熱的な先生の下に集まった予備校生(多くは浪人生)の記録である。「落とし穴」に嵌まった若者(「パチンコ三兄弟」)も紹介されるが、目を輝かせて自分の夢を語る若者たちの姿は感動的である。

浪人生活は、人生のレールから外れた疎外感、何の未来も保証されない不安感を伴う。しかし、その経験こそがドストエフスキーの理解につながる。先生は説く。本書で描かれる予備校生のドラマも、「闇」の中にこそ「光」が輝くというドストエフスキー文学の神髄を表すかのようである。

予備校空間のドストエフスキー

芦川 進一

私は先生から受験に必要な知識だけではなく、世界の向き合い方を学んだ。先生は「誤魔化さない!」という言葉をよく使われた。英文の暗記・暗唱を推奨するのも、テキストの内容を



正確に理解しているかを問うためであった。その作業の重要性は、先生の恩師である小出次雄先生との出会いを描いた第2部を読むと、さらに理解が深まる。

芦川先生が浪人生だった時、美しい景色を見た小出先生が一言。「素晴らしいな!」。芦川先生が「はい」と応じると、「この馬鹿もの! 嘘をつく

な!」と一喝された。小出先生は、受験勉強に疲れた芦川先生が対象と真摯に向き合えていないことを見抜き、こう教えてくれた。「毎日十秒でもいい。花でも、木でも、雲でも、夕日でも、人でも、文章でもいい。『これは!』と思う素晴らしいものを見つけたならば、兎に角黙ってそれを十秒間見つめるのだ!」

芦川先生はドストエフスキーさらには聖書の精読により、その先を追究されている。その域に達するのは簡単ではないが、しかし対象を誤魔化さずに認識するという姿勢は、多くの人の心に刺さると私は考えている。受験に失敗したり進路に迷ったりしている若者がいたら、ぜひ本書に挑んでほしい。(河合文化教育研究所・2640円)

著者は1947年静岡県生まれ、河合塾英語科講師、河合文化教育研究所研究員。著書に「カラマーゾフの兄弟 論」など。

赤上 裕幸 (防衛大学校准教授) 本紙書評委員